1945年8月6日原子雲の写真撮影者　　2023年9月末まとめ

市民

撮影者（当時の職務）	枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影場所・その後の経緯
山田　精三（広島三中生徒・中国新聞社企画局勤務）	1	中国新聞社、原爆資料館がプリントを保存	爆心地から北東約6㌔、安芸郡府中町の水分峡で。原爆のさく裂約2分後とみられ、地上で最も早い原子雲を撮る。「夕刊ひろしま」46年7月6日付で初掲載。28年生まれで健在
松重　三男（広島県職員・レントゲン技師）	2	資料館がプリントを保存	安佐郡古市町（安佐南区）の自宅から避難した、爆心地から北に約7㌔の神田橋から暗箱カメラで2枚を撮影。89年に78歳で死去
深田　敏夫（崇徳中学徒）	4	資料館がネガ4コマ、プリントを保存	卒業後も動員が続いた陸軍兵器補給廠（南区霞）の2階窓からさく裂約20分前後をベビーパールで連続撮影。爆心地から南東約2・6㌔、最も至近距離となった。2009年に80歳で死去
北村　久夫（筆製造業）	1	資料館がプリントを保存	爆心地から南東約13㌔、熊野町の自宅兼作業場に近い榊山神社辺りから撮影。さく裂約20分後とみられる。88年に64歳で死去。
織田　吾郎（農業・食糧増産指導）	2	資料館がプリント2枚を保存	爆心地から北東約40㌔、本村（安芸高田市）の自宅から撮影。さく烈約15分後を中国新聞57年8月5日付で、約20分後のキャビネ判も86年8月3日付で公開。99年に86歳で死去。
鴉田　藤太郎（傷痍軍人広島療養所勤務）	1	資料館がプリントを保存	北東約25㌔、現在の東広島市にあった陸軍傷痍(しょうい)軍人広島療養所から見えた原子雲を撮影。78年に60歳で死去
石井　治三	1	資料館がプリントを保存	約22㌔の呉市阿賀、自宅近くの裏山から約30分後に撮影。遺族が88年に寄贈
榎本　隆清（写真館経営）	1	プリントは本川小、資料館が保存	山崎与三郎（76年に86歳で死去）が53年本川小へ寄贈していた写真に「安佐郡緑井村より」の説明書きがあった。研屋町（中区紙屋町）で写真館を営み、安佐郡安村(安佐南区）に疎開していた榎本隆清の撮影と23年秋に確認。爆心地から約10㌔内外から撮っていた。58年に58歳で死去
不明	1	プリントは本川小、資料館が保存	「広島原爆戦災誌」第3巻（71年刊）に「海田市町（海田町）の陸軍需品廠から撮影」として収録。山崎与三郎の提供で、撮影者は軍関係とされる。2013年、本川小の山崎寄贈資料から鮮明なプリントが見つかった
不明	1		広島流川教会（中区鉄砲町）が75年夏に開いた資料展で、被爆牧師谷本清（86年に77歳で死去）が信者の提供という原子雲の写真を紹介し、中国新聞同年7月30日付が「五日市町（佐伯区）方面から」と掲載。プリントは残っていない

軍所属

木村　権一（陸軍船舶練習部）	3	ネガ3点を資料館が保存	爆心地から南東約4・2㌔の船舶練習部（南区宇品東5丁目）で、さく裂約15分後の原子雲3枚を撮影。さらに炎上する市街地を3枚組みで収める。73年3月に67歳で死去。遺族が「8月6日」撮影ネガ6点を2006年資料館に寄贈
尾木（おき）　正己（呉海軍工廠火工部設計係）	1	大和ミュージアム、資料館がプリントを保存	呉海軍工廠（呉市若葉町の海上保安大学校）から、さく裂約40分後、火工部のライカで撮影。朝日新聞大阪本社版45年9月13日付、東京本社版16日付が掲載。2007年に93歳で死去。東京から海軍調査団で入った技術中佐北川徹三がオリジナル・プリントを残し、遺族が2004年呉市に寄贈。
小平（こだいら）　信彦（陸軍野戦船舶本廠・技術大尉）	5	資料館がプリントを保存	沖合の金輪島にあった野戦船舶本廠修理部第2工場長を務めていた。爆心地から南東約6㌔、レントゲンフィルムで高さ8000㍍に上っていた原子雲を撮影。2019年に100歳で死去
斎藤　実	1		入院先の呉海軍病院から撮った原子雲の写真が、産経新聞57年7月31日付で掲載された
橋本　勤次郎（海軍少尉）	1		中国新聞46年8月1日付が、倉橋島（呉市音戸町）の特殊潜航艇基地から「橋本勤次郎元海軍少尉が撮影」との写真を掲載。しかし、53年発行「元海軍士官名簿」、88年発行の「特潜会名簿」にも「橋本勤次郎」の名前は見当たらない。

（敬称略）